

火星

平成二十五年十一月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

みづうみのけふ荒々と菊畑

波音に倦みてきちきちばつたとぶ

蓑虫が弘法の山揺らしゐし

高野槇買ふ秋日傘たたみけり

己が影さびしき傾ぐ藁ぼつち

夕映えの藁ぼつちより當麻の子

人声をまぶしみて飛ぶ草の絮

夕づくや顔大いなる晩稻刈

出来秋の日暮の灰の匂ひけり

せんべいを畳に踏みし秋の暮

太白星

大屋根の鬼の見てゐる豆筵
子どもみこし来たり鳩とぶ雀とぶ
みこし庫こども法被の色積まれ
川下の水の豊かに花火の夜
花火師の影の濃くなる通り雨
背中より風の吹きくる花火の夜
盆のもの炊ぎて暑き手を洗ふ

杉浦典子

浜口高子

瀬のおとに草のそよぎに盆来る
柴漬を揚げ月影を毀ちけり
初風や鴨羽搏ける脇白し
桃うつとりしてゐて袋はがされし
秋霖の止みし火襷雫せり
山気に鋏入れて柚子の実いただきし
裏山のやや退りたる九月かな

火星作品 山尾玉藻選

盆 唄の袂ふくらむ訛かな 神戸深澤 鱧

浜へ出て風に紛れし踊かな

山へ打つ花火短し粗筵

花火莫莖草のほてりを滑らしぬ

浅酌に鯉の浮ききし魂まつり

河内野の蚊柱に風止みにけり 大和郡山城 孝子

梅花藻の花に影ある土用かな

八月や馬のふぐりのかがやける

夜の秋の蘭 鑄反り糞反り

陪塚は草の中なり秋つばめ 宝塚蘭定かず子

蝸のいちばん遠い樹なりけり

槓売の鉢の音の後ろむき

翹屋の前に踊をさらひをり

みづならの空の平らかなる九月
有馬口まで秋風と下りけり
河原石踏みゆく音や盆の月
足投げて座る人形つくつくし
案山子へ向く運動場の鼓笛隊
舐めてみて鬼灯苦き一つ星
仕舞湯に隣の湯音盆の月
きりぎりす日あたる方へ鳴きうつり
初嵐胸もとゆたかなる佛
黙禱に子をひきよする終戦日
河渡る風夕菅にとどきけり
スタミナの葉いろいろ夜店の灯
猫の目の緑がかりし盆の風
打水を渡つてきたる訃報かな
谷底の音にはづしぬサングラス
香煙の裡に八月送りけり
蝸やしづくくしてゐる木の名札

八幡坂口夫佐子

吹田田中文治

宝塚山田美恵子

選のあとに 山尾 玉藻

山へ打つ 花火短し 粗筵 深澤 鱧

山間の夜空に何度か揚がった花火は東の間のうちに終って仕舞った。粗筵に座したまま暫く夜空を眺める作者。花火が果てた後の淋しさどことなく満たされぬ思いを具現する「粗筵」である。

培塚は草の中なり 秋つばめ 城 孝子

培塚とは大きな古墳に近接する小さな古墳、近親者や従者を葬った塚のこと。雑草に埋もれてしまった培塚の上を、南方へ発つ日の近い燕がしきりに舞っている。いずれ燕たちも飛び去り、置きざりにされたような培塚は寂寞たる趣を一層深めることだろう。

槓の 鈇の 音の 後ろ むき 蘭定かず子

京都東山六道珍皇寺の六道参では盆用意に高野槓や盆花も売られる。鮮やかな盆花に比べ槓は至って地味。槓売が背を向けて槓の枝を切る様子を「鈇の音の後ろむき」と簡潔に言いとめ、読み手に槓売の鬩りあるイメージを実感させ、鈇の鈍い響きを聞かせる。なかなか密度の濃い省略である。

足投げて座る 人形つくつくし 山田美恵子

両足を投げ出して宙を見つめる人形はいかにも虚無的な存在である。外では法師蟬が執拗に鳴き続けるが、人形の様子

は一向に変わらない。法師蟬の声がむなしく響くばかりである。

黙禱の子の手ひきよす 終戦日 田中 文治

終戦記念の式典での囁目詠か。黙禱の刻、両手を合わせる稚い子を思わず抱き寄せた人物がいたのだろう。その様子に、平和を守り続けねばならぬ大人の責務を強く感じた作者。獅子座作品へ夜の秋の松を流るる湯もみ唄の叙情はなかなか上質である。

打水を渡つてきたる 訃報かな 坂口夫佐子

打水を終え涼やかな気分浸っていた時に訃報が入った。全体の流れに切迫したひびきがなく、さほど近しい人の訃ではなかったのだろうが、打水の涼やかさがしんみりとした心情を伝える。

あかときの樹の間飛び交ふ 蟬つづて 山本 耀子

明け近く蟬が鳴きだし勢いよく木々を飛び移っている。「蟬つづて」とは、まだ明けきらぬ薄明りの中を飛び交う蟬たちの異様な黑影を的確に捉えた措辞。あー、今日も暑くなるのだろうな。

大阪へ 鴉が 帰る 葛の花 大山 文子

近年、都会は鴉たちのオアシスと化してしまつたようだ。まるで遙かな昔より其処で揺れているような「葛の花」がともアイロニカル。(以下略)

同人一

白数康弘

恒星圈

坂口夫佐子

高尾豊子

茶をたてて雨やりすぞす葭簀かな
根こそぎの楊の放つ晩夏光
蟻螂の斧ひつかかるポストの口
かざし見る刃金の波紋夏の果
箱膳をはさみて座せる夜の秋

炎昼に波打つてゐる山羊の腹
瑠璃蜥蜴人は日陰に集まりぬ
つくつく法師高校野球の延長戦
ゲーム機に遊ばれてゐるつくつくし
兜虫の約束をして戻りけり

城孝子

高松由利子

土用凧はちきれさうな牛の乳
くもの囀に風のからまる土用かな
夕立や佛の団子出来上る
鬼灯を提げゐし右手重かりし
うぶすなは田の水落つる終戦日

流灯を放つ山並ももいろに
雨あがり胡弓に始む踊唄
稲つるび戒名記す薪積まれ
盆供花をせはしく束ねピアスの子
天の川建て替へられし音楽堂

獅子座

山尾玉藻推薦

田中文治

雨音に囲まれてゐし竹婦人
夜の秋の松を流るる湯もみ唄
旅鞆置くや故山の道をしへ
故郷の日暮のはやし石叩

涼野海音

日盛の窓を過ぎゆく弓袋
護送車のカーテン揺るる日の盛
呼鈴の音に振り向くとかげかな
鉄橋の今しづかなる終戦日

西村節子

早稲の香につつまれ灯る閻魔堂
ひとつかみの米を地蔵に厄日かな
嵐電の踏切渡る夜の秋
銀漢に犬の遠吠えをさまりし

井上淳子

夕立あと佐久の鯉田の迫り上がる
かなかなや藤村旧居の赤おざぶ
初秋や荒草の実に日のぬくみ
朝顔を数へる指のはじめから

林 範 昭

仲秋や生簀へ伸びる蔵の影
佐保風の向き変りけり秋燕
かなかなの息継ぎの間の電子音
秋嶺へ塞ぎの虫を放ちけり

藤本千鶴子

水打つて糺の森の古書の市
大理石の壁に吾の影秋暑し
樟脳の香と乗り合はず夏の雨
黒髪をかたく結びをり田草取

藤田素子

残暑かなタイトスカートより太もも
家具売場のベッドに女秋暑し
鰻屋のうの字跳ねある秋の風
盆三日母の手描きの献立帳